

国際ゴンドワナ研究連合（IAGR）2023年総会及び第20回ゴンドワナからアジア国際シンポジウム参加報告

吉田勝（ゴンドワナ地質環境研究所）・角替敏昭（筑波大学生命環境系）

表題の集会在10月7日～9日に新潟市で、付属野外巡検が10日～11日に糸魚川市で行なわれた。総会及びシンポジウムの口頭発表は新潟大学五十嵐キャンパスの図書館の大講堂で分科会無し、ポスター発表はメインロビーで行われた。参加者登録者は勤務地別15カ国140人前後で（写真）、国別では多い順に日本（54人）、中国（45）、インド（8）、韓国（6）、カナダ（4）、スリランカ（3）、英国（3）、ラオス（2）、ポーランド（2）、イタリー、ロシア、台湾、米国、（各1）であった。所属国籍では他にオーストラリア、オランダ、コンゴ民主共和国、ナイジェリア、パキスタン、ルワンダなどがあつた。シンポジウムでは口頭43題（基調講演4題を含む）とポスター54題の発表があり、キャンセルは数題であつた。以下に日を追つて報告する。



10月7日、多数の会議参加者が宿泊している市内中心部のANAクラウンプラザホテルで17時から参加登録、18時から20時頃まではアイスブレイカーで大いに賑わつた。

10月8日、朝8時にホテルからバス2台で新潟大学五十嵐キャンパスへ。会場の図書館大講堂では15分間の開会式で学部長、学長、実行委員会委員長、IAGR事務局長らの挨拶があつた。引き続いて第1基調講演「Indian Tsunami Early Warning System (ITEWS)」(H.K. Gupta) 30分、その後は一般の口頭発表18題が、ポスターコアタイム1時間、ランチブレイクと2回のティーブレイクを挟んで各15分間ずつ行われた。

17時にシンポジウムが終わり、貸切バスでホテルに移つて夕食会、IAGR総会、懇親会とIAGR評議

委員会があった。総会では Gondwana Research Best Paper Award 授賞式があり、「Long-term Phanerozoic global mean sea level: insights from strontium isotope variations and estimates of continental glaciation」(Van der Meer D.G., Scotese Cr., Mills B.J., Stuijs A, and Van der Weg R.M., Gondwana Research 111, 103-121)と「Linking energy transitions, energy consumption, and environmental sustainability in OECD countries」(Khan I., Zakari A., Ahmad M., Irfan M. and Hou F., Gondwana Research 103, 445-457) の2論文が受賞し、著者らに賞状とメダルが贈呈された。10月9日 朝9時から基調講演3題(1) Neoproterozoic tectonic evolution and proto-basin of the Yangtze Block, China (Yunpeng Don), (2) India and South China in the Tonian: New constraints from the Harohalli Alkaline province (Joseph G. Meert)と(3) Intra-plate oceanic island basalts: from formation to accretion (Inna Safonova) が各30分間あり、引き続いて一般講演20題がポスターコアタイム等を挟んで発表された。

17時には簡単な閉会式とその中での Student Best Poster Award 授賞式があり、第1位「Petrological and geochemical variation of charnockitic rocks in the Wannu Complex, Sri Lanka」(Pahan Abewardana, Dharmapriya P.L. and Malaviarachchi S.P.K.), 第2位「Paleozoic high pressure shists in the Omi area, Itoigawa city, Niigata」(Yoshida, T. and Satish-Kumar M.), 第3位「Ultramafic-hosted magnesite deposits of Salem Mafic-ultramafic complex, Southern India: Spectral and stable Strontium isotopic insights」(Haritha A., Rajesh V.J. and Satish-Kumar M.) が賞状と賞品を贈呈された。

以下にはシンポジウム全体や講演内容について筆者らの感想を記す。

<吉田> 久しぶりの対面の集会であった。第1基調講演者のインド地質学会長 H.K.Gupta 氏は37年前筆者を初めてインドに招聘したケララ州地球科学研究センターの所長であった。IAGR 事務局長の M. Santosh 氏も当時のセンター職員で、筆者とはその時以来の付き合いであり、日本で3人そろったのは感激であった(写真)。シンポジウムでは中国人研究者の参加数と発表数が多く、またその発表内容には大陸テクトニクスや年代学に高い程度のもものが少なくないと感じられた。興味を引いたのは2日目の Joseph G. Meert の基調講演で、2000年代の初め頃に彼が北西インドブロックの古地磁気データから主張していた原生代東ゴンドワナからのインド孤立説を、新たに南インドクラトン中のアルカリ火成岩脈の古地磁気データで修正・補強した発表である。しかしインド孤立説に対しては Yoshida & Upreti (2006, 2011)が、原岩がネオ原生代である高ヒマラヤ片麻岩類の碎屑性ジルコン年代分布から原ヒマラヤ帯は南極・オーストラリアを含む環東南極変動帯から碎屑物の供給を受けていたと指摘し

ているが、それについての言及はなく、その点からはインド孤立説が確定したとは言いがたいのではないかと思われた。

2日目の一般講演、Lijun Wan による「Yangtze and Cathaysia blocks of South China: Their separate positions in Gondwana until early Paleozoic juxtaposition」は Geology 51 巻(2023年)に発表された論文で、従来ゴンドワナ北東縁辺に位置していたと一般に考えられていた南中国クラトンが一体でなく、地質



左から M. Santosh 氏、筆者と H.K.Gupta 氏

構成、とりわけ詳しい岩相層序と碎屑性ジルコンの年代分布などから **Yangtze Block** はインド北西縁に、**Cathaysia Block** はオーストラリア北西縁付近に分かれて位置していたと論じている。**Yoshida & Upreti(2022)** で考察したヒマラヤの初期古生代変動帯を始めとする周 Gondwana 変動帯の構成に資するところがある内容だった。

<角替> 20 回目の区切りの大会である今回のシンポジウムは、**IAGR** の発祥国である日本での開催となった。過去には高知、福岡、つくばで開催されており、新潟が国内で4カ所目の開催地である。**COVID** の影響により、2020 年のシンポジウム（ロシアで開催井田理予定であった）はキャンセル、過去2回の大会は中国国内（青島と成都）での実施となっていた。したがって、私としても4年ぶりの参加となり、久しぶりに **IAGR** 関係者や Gondwana 研究者との有意義な議論ができたことは、大きな収穫であった。発表内容としては、例年通り中国人研究者によるものが多かったが、特に南中国地塊の年代・岩石学およびテクトニクスに関する新たなデータが、カナダ・**Waterloo** 大学の **Lin Shoufa** 教授や **Wang Lijun** 博士によって提示された。南中国地塊は南部北上や阿武隈の形成史と密接に関係していると考えられているため、今後両者のさらなる対比が必要となるだろう。最後に、新潟大学の **Satish-Kumar** 教授をはじめとする **LOC** のメン

バーには、学会の準備および期間中において多大なご尽力をいただいた。ここで御礼申し上げます。